

SHOW-HISVシネマフルーツ

★★★★

戦狼2 ウルフ・オブ・ウォー2	
2017年・中国映画 配給／AMGエンタテインメント・123分	
2017(平成29)年11月23日鑑賞	ネット配信映像

Data

監督：吳京（ウー・ジン）
脚本：吳京（ウー・ジン）／クン・
　　ドン
出演：吳京（ウー・ジン）／セリー
　　ナ・ジェイド／吳剛（ガン・
　　ウー）／張翰（ジャン・ハン）
　　／余男（ユー・ナン）

みどころ

中国映画の2017年の大ヒット作にして、中国・アジアの興行収入歴代トップになったのが本作！それは、アフリカの某国で起きた内戦で、「中国版ランボー」と呼ばれる主人公が、中国人民と祖国のため、大活躍するからだ。

これには第2期目の支配権を固めた習近平国家主席も大喜び。官民あげての大喝采だが、さて日本人はそれをどう見ればいいの？

日本の国技・大相撲も揺れているが、それ以上に「朝鮮半島有事」は、日本にとって最大の問題。『シン・ゴジラ』（16年）ではそれなりの「危機管理体制」がとれていたが、日本版ランボーはいるの？ラストで大写しになる中国のパスポートを考え、さらには、中国の国歌の内容を考えれば、平成31年5月からは元号が改まるという時代状況の中、現在の国歌である「君が代」の是非も考える必要があるのでは・・・？

———— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

■■習近平による社会主義現代化強国実現は？■■

去る10月18日から24日まで中国共産党の第19回大会が開催され、習近平体制の2期目の5年間がスタートした。そこでは、①「チャイナセブン」と呼ばれる7名の常務委員が全員60歳代となり、習近平の後継者と目される50歳代の人物が1人もいなかつたこと、②新中国を「建国」した毛沢東、中国を「富国」にした鄧小平に並んで、中国を「強国」にしようとする習近平の思想が、毛沢東思想、鄧小平理論に続く「習近平による新時代の中国の特色ある社会主義思想」とされたこと、③「2つの100年」のうちの1つである、1921年の中国共産党建党100年にあたる2021年には、胡錦濤が唱え

た「小康社会」の実現が目標だったが、それは既に実現できたとした上で、もう1つの100年になる、1949年の中華人民共和国建国100年にあたる2049年に、中国を「社会主义現代化強国」にするとの目標を明確に設定したのが大きな特徴だ。

この3つのことから、習近平は2期10年の任期の枠を大きく超えて、3期目はおろか、毛沢東、鄧小平と同じように、80～90歳まで、つまり2049年の社会主义現代化強国実現まで指導者を続けるのではないか、との観測がまことしやかに流れている。

11月8～10日に北京で開催された「米中首脳会談」における、故宮を借り切ってのトランプ大統領の接待は、まるで中華帝国の皇帝のような振る舞いだったことを考えても、その見立てはかなり正しそうだ。近年ハリウッドに比肩する力をついている中国の映画界では、昨年は『人魚姫／美人魚』(16年)が大ヒットしたが、今年はそんな政治状況の中、本作が大ヒット！それは一体なぜ・・・？

■口■「中国版ランボー」はNO.1の大ヒット！それはなぜ？■口■

中国人民解放軍90周年の記念日となる2017年8月1日の「建军節」に合わせて公開された本作は大ヒット！2017年11月20日時点で興行収入は56億7800万元（約963億円）となり、中国映画史上最高ヒット作になった他、アジア映画として歴代トップとなった。ちなみに、2016年の映画興行収入トップは、『人魚姫／美人魚』で、その額は33億元（563億円）だった。本作はタイトル通り、2014年に公開された『ウルフ・オブ・ウォー ネイビー・シールズ傭兵部隊vs PLA特殊部隊』のパート2。10月26日付読売新聞は中国総局長竹腰雅彦氏の名前で「異質の『強国』の危うさ」という見出しがつけ、本作が「中国版ランボー」と呼ばれたことを含めて、その特徴を詳しく解説しているので、これは必読！

ネット情報によれば、今年の中国映画市場における興行収入の総額は、同日午後に500億元を突破し、ここ数年にわたり期待されていた「500億超え」をとうとう達成し、観客動員数については、現時点で14億4800万人、と発表されている。また、中国では03年から映画の産業化が推し進められ、02年には興行収入総額が10億元（約170億円）未満だったが、10年には初めて100億元（約1695億円）を突破。13年に200億元（約3390億円）、15年に400億元（約6782億円）と、着実に市場規模を拡大しており、12年には日本を抜き去って世界第2位の映画市場となり、わずか10数年の間に、市場の規模は50倍に膨れ上がったと発表されている。

ちなみに、私が映画検定3級の資格をとった2007年1月の時点での世界最高の興行収入をあげた映画は『タイタニック』(97年)で10億ドルを初めて超え、総興行収入は18億4500万ドルだったが、現在のそれは、『アバター』(09年)で、その総興行収入は27億8796万ドル。中国で歴代No.1ヒットの本作のそれは67億7950万ドルで、やっと世界のトップ100に入ったところだから、まだまだ米中の差は大きいと言

わざるを得ない。しかし、それはそれとして、本作がこのように大ヒットしたのは、一体なぜ？

■□■本作の舞台はアフリカ！そこで内戦が発生すると！■□■

「アメリカ・ファースト」を唱えるトランプ大統領率いる米国との決定的対立を回避しながら、米国に追いつき追い越せ、という長期戦略を確立させた中国が、①世界一流的軍隊、②科学技術の最先端、③トップレベルの総合国力と国際影響力を目指していることは明らかだが、本作を観ていると、そのことが実によくわかる。とりわけ「一带一路」構想において、中国は「アメリカ何するものぞ」の心意気でアフリカではトップの影響力を保ち続けているが、本作の舞台はそのアフリカだ。アフリカではこれまで各地にさまざまな内戦が起きているが、中国が支配を及ぼしているアフリカの某国で内戦が発生すると…？

現役を退いた元人民解放軍の軍人冷鋒（レン・フォン）（吳京（ウー・ジン））は、退任後、アフリカで悠々自適の生活を送ろうとしていたが、そこで「内戦」が発生し、そこに住む中国人民が危機に陥ると…？「お前ら劣等民族は、弱々しく生き続ける運命だ」と言い放つ米国軍人に対して、元軍人である本作の主人公冷鋒は、「バカ野郎、それは昔の話だ！」と言い返すところが、本作のハイライトになる。

■□■本当にランボーと瓜二つ！■□■

シルベスター・スタローン主演の『ランボー』シリーズ全4作は「アメリカ・ファースト」の映画だったし、ランボーの活躍ぶりは人間の能力をはるかに超えるすごいものだった。本作の主人公・冷鋒を演ずる吳京（ウー・ジン）は、シルベスター・スタローンほどの巨大な体格ではないが、引き締まった見事な肉体をしている。そして、特殊部隊の更に上をいく特殊部隊である「戦狼中隊」の一員だったという彼の身体能力と戦闘能力は、ランボーに勝るとも劣らないものだ。

冒頭に見る海中での戦闘シーンを手始めに、ストーリー展開の中、何度も登場する戦闘アクションはすごい。その連續に多少飽きてはくるものの、とにかくそのド派手さと冷鋒の活躍ぶりが本作最大の見どころになる。とりわけ、本作後半の「カーアクション」ならぬ「戦車アクション」は、ハリウッドを超えた中国映画のあつと驚く底力を示すものだ。そんな戦闘アクションで冷鋒は、元軍人の何建国（フー・ジエングオ）（吳剛（ガン・ウー））と、軍事オタクで金持ちの二代目である卓亦凡（ジェオ・イーファン）（張翰（ジヤン・ハン））との「3人タッグ」で見事な活躍を見せるので、それに注目。ランボーは単独行動が目立っていたが、冷鋒はそんな「3人タッグ」でのチームワークが特徴。本作後半では、ただただそれに酔いしれたい。

■□■冷鋒の行動力の心の支えはどこに？■□■

他方、そんな戦いの中で冷鋒の行動力の心の支えになり、かつ彼の仇討の執念の底にあるのが、冷鋒の失踪した元恋人の龍小雲（ロン・シャオイン）（余男（ユー・ナン））。冷鋒の胸にいつも掛かっているネックレスは、その龍小雲を撃った銃弾だ。また、冷鋒が内戦の起きたアフリカの某国まで来ているのは、陳医師や彼と一緒に働いていた米国籍の女医レイチェル（セリーナ・ジェイド）や、伝染病に抗体を持つ女の子バーシャを救うため。そしてまた、内戦の混乱下で中国の大使館に逃げ込んだ中国人や、某工場内に逃げ込んだアフリカ人労働者たちを救い出し、海上に待機している中国海軍の艦船まで彼らを送り届けるためだ。この内戦の起きた国が具体的にアフリカのどこの国かは明確にされないが、本作のような設定が現実に起こる可能性が高いことは容易にわかる。

「朝鮮半島有事」を想定しなければならない昨今、日本でも日本版「ランボー」が必要なはずだが、残念ながらその構想は全く練られていない。しかし、米国での『ランボー』シリーズのヒットを十分学習した中国は、すでに「アフリカ有事」を想定し、「ランボー」と瓜二つの男・冷鋒を誕生させた本作で、その実践訓練まで・・・？

■□■敵役には誰を想定？「朝鮮有事」のランボーは・・・？■□■

第19回党大会終了の直後、習近平は対外政策を担当する宋濤中央対外連絡部長を「特使」として北朝鮮に派遣した。これはアメリカ・日本をはじめとして、「対話」ではなく北朝鮮への「圧力」を強めようとしている世界の方向に沿って、核とミサイル問題について金正恩の「自制」を狙ったものだが、何と金正恩はこの特使と会わなかったそうだから、習近平のメントツは丸づぶれ。そんな事態に、習近平の金正恩独裁体制への影響力の低下を感じ取ったトランプ大統領は、直ちに北朝鮮を「テロ支援国家」に再指定するという強硬なカードを切った。しかして、その当否は？そして、影響力は？

アメリカは既にCIAやFBIとも協議しながら金正恩の暗殺計画を練っているはずだが、今や中国は秘かにそこへの協力をしているのでは・・・？そんなことまで考えている私は、①全面戦争の可能性、②局地戦争の可能性以上に、③金正恩の暗殺計画実行の可能性のほうが高い、と考えている。しかして、本作の内戦の中核部隊として登場するテロリストの男と女は一体何者？もちろん、それは曖昧にされ、雲の中の存在だが、彼らのテロリストとしての能力の高さにビックリ。一体どこでこの訓練を受けたのだろうか？テロリストが果たす役割の邪悪さとそれを退治する正義の味方・冷鋒のカッコ良さは、本作をたっぷり堪能すればいいが、アフガン有事でランボーが果たした役割や、本作に見るアフリカ有事で冷鋒が果たしている役割からもう一步進めて考えてみれば、「北朝鮮有事」の時に、ランボーや冷鋒のような役割を果たす男の登場は・・・？

■□■中国の国歌は？パスポートは？■□■

モンゴル人横綱・日馬富士による貴乃花部屋の関取・貴乃岩に対する傷害事件は、書類

送検されたから、近いうちに起訴（略式・本式）・不起訴が決まり、起訴された場合の罪も決まるはず。今回の事件が2010年に起きた同じモンゴル人横綱・朝青龍による傷害事件よりも興味深いのは、日本の国技・大相撲について、モンゴル勢VS反モンゴル勢、もつといえ、モンゴル勢+それによりかかっている現在の八角理事長率いる相撲協会幹部（？）VS日本独自のあるべき相撲道を目指す貴乃花親方という争いの構図が否応なくあぶりだされてきたことだ。久しぶりの日本人横綱・稀勢の里の誕生は、これらの対立構造を浮かび上がらせてことなく大相撲人気に拍車をかけるかと期待されたが、相次ぐけがと休場のため、相撲協会における貴乃花親方とモンゴル勢との対立は今や修復不可能なところまで・・・。

他方、去る11月29日に北朝鮮が発射した新型ミサイル「火星15号」と、12月4日から始まった大規模な米韓共同軍事演習は、経済封鎖を中心とした圧力の強化によって、本当に今年の冬を越せるかどうか分からなくなつた金正恩体制とアメリカとのチキンレースがぎりぎりまで迫っていることを示している。金正恩の暗殺計画が成功すれば、多少なりとも南北統一に向けたソフトランディングも可能だが、「アメリカ十韓国」と北朝鮮との間でホントの軍事衝突が起きれば、双方の被害と日本の被害が最大の問題となる。そこに大きく効いてくるのが中国の動きだ。冷鋒はアフリカの某国における内戦で大いにその役割を發揮したから、これに対して中国政府、中国共産党が最大の感謝の意を示したのは当然。しかして、本作ラストに大写しになるのは、何と中華人民共和国のパスポートだからそれに注目。

中国語の勉強が最近大いに進んでいる私は、現在の中国国歌が「義勇軍行進曲」（作詞：田漢、作曲：聶耳）で、もとは映画『风云儿女』の主題歌であることを学んだが、日本人の皆さんには、その国歌がどんなものか知っているだろうか？日本人が国歌「君が代」を歌うのは大相撲の優勝が決まった千秋楽の時くらいだし、その歌詞は古色蒼然たるものだ。天皇陛下の生前退位によって、いよいよ平成の世は平成31年4月30日で終わり、新たな元号が始まるが、この際、元号だけでなく、国歌の是非も考えてもいいのでは？かなりの暴論になることを覚悟で言えば、中国国歌はもとより、フランス国歌の「ラ・マルセイエーズ」（La Marseillaise）、アメリカ国歌の「星条旗」（The Star-Spangled Banner）、等と比較しても、現在の日本国歌はイマイチ甘すぎる、優しすぎる（？）のでは・・・？

2017（平成29）年12月8日記